

国際交流事後活動ニュース

# MACRO COSM

◎特集 ブロック大会

●講演 国際日本文化研究センター 河合隼雄 所長

マクロコズム '96.11



vol. 13

(財)青少年国際交流推進センター

## 海外派遣青年のつどい（ブロック大会）

人を、文化を、そして自然を楽しもう！～故国を知る～

国際交流活動を中心にして社会活動を推進している人々にとっても、活動の仲間との情報交換は大事な活力源です。また、国際交流や国際協力の場において、自国や地域のことを理解して活動に望むことは大切な要素です。「海外派遣青年のつどい」（ブロック大会）は、総務庁青少年対策本部が行う青少年国際交流事業の参加者を中心として各ブロックの国際交流活動を推進する関係者が集い、情報交換を行うと共にお互いに研鑽を積む場として開催されています。

### 近畿ブロック大会（7月6日～7日／滋賀県）

「もっと外国を知ろう、日本を教えよう！」

会場：滋賀県青少年会館

○「第8回世界青年の船」教官であった滋賀大学経済学部教授のヘルムート・モーズバッハ氏の講演、留学生も交えて「外輪船ミシガン」での琵琶湖遊覧、今年度の総務庁青年海外派遣事業参加予定者へのオリエンテーションと多彩なプログラムを盛り込んだ二日間でした。

### 四国ブロック大会（8月3日～4日／高知県）

「青年海外派遣事業、私ならこうする！」

会場：土佐和紙工芸村くろうど

二日目は、土佐和紙の紙漉きを体験し、文化の

▼ 継承の大切さを学びました



▲「夢のある海外派遣事業をみんなで考えよう」とワークショップを行いました。全体発表では、ユニークな楽しい企画が、次々に発表されました

九州ブロック大会（8月24日～25日／佐賀県）

「国境と世代を越えて、ネットワークを創り上げよう！」

会場：嬉野温泉「和多屋別荘」

○初日は、記念講演、帰国報告、各県の活動報告を含めた全体討議などを行い、二日目は、世界炎博覧会にて、佐賀県青年国際交流機構の世界民族文化紹介への出演を見学。

中国ブロック大会（8月31日～9月1日／島根県）

「国際交流の面白さと必要性」

会場：隠岐島「あいらんどパーク」

「田舎にしかできない国際交流」と題して、まず▶「地球市民の会」会長の古賀武夫氏に講演をしていただいた後、地方の国際化についてのパネルディスカッションを行いました



北信越ブロック大会（8月31日～9月1日／富山県）

会場：八尾温泉「おわら観光リゾートホテル」

○基調公演は、第1回青年海外派遣（昭和34年）参加者の石澤義文氏から、中国との交流体験を通しての国際交流についてのお話をいただきました。

▼「風の盆まつり」で「おわら踊り」を見学、体験



二日目は、そば打ち。自分が打ったそばで昼食。「ウーン、食べられるようになるかなあ。」と一所懸命の総務庁青少年対策本部国際交流振興担当の井上補佐▶



▲ 三浦日本青年国際交流機構副会長の開会あいさつ  
和室のなごやかな雰囲気で開催

中部ブロック大会（9月7日～8日／愛知県）

「これからの国際社会の中で、私たちは何ができるのか」

会場：愛知県一宮勤労福祉会館

○ 財団法人豊田市国際交流協会事務局長であるベトナム人のパイ・チ・トルン氏の記念公演とその後のディスカッションを中心プログラムとしました。



▲ 二日目の野外活動での、ラフティング体験  
まず、愛知県 IYEO の鈴木会長から基礎講習をうけて

▼ 堂にいったものでしょう？



東北ブロック大会（9月7日～8日／岩手県）

会場：綱張温泉「岩手山麓国民休暇村」

「一握の砂から銀河へ」



◀ 基調講演は、「地域からの発信」と題し「第6回青年の船」参加者である、川井村役場勤務の横道氏に国際交流から得た地域起こしへの取り組みについて、体験談を交えて話していただきました

関東ブロック大会は来年、2月8日～9日に東京で開催します。



## 人間関係の文化差

国際日本文化研究センター所長  
京都大学名誉教授

河合 隼雄

ただいまご紹介いただきました河合でございます。このように世界中の沢山の国々から参加しておられる集まりでお話ができるのを嬉しく思っております。

私の専門は心理療法でありまして、いろいろ人間関係の悩みを持って相談に来る方にお会いしております。そういう仕事をしております間に、文化差のために人間関係がうまくいかないという例に接することも多くなりました。例えば、日本人で外国に留学してうまくいかないとか。非常によくありますのは、国際結婚をして、夫婦の関係がうまくいかない、あるいは、日本人で何処かの国へ3年とか4年とか、長いときは10年行って、日本へ帰って来て、日本の国にうまく適応できない。そういう例に接しておりますうちに、私は文化によって人間関係の在り方が違うことをよ

く知っていることが大事ではないかと考えるようになりました。

### 文化の差による誤解

#### アメリカ

文化の差によってどういう誤解が生じるか、という例を少し挙げてみたいと思います。日本の会社の支店をニューヨークに作り、支店長として日本人が行きました。そしてアメリカの方を3人雇いました。1年後には月給を上げます。その時に日本のその人が「自分は公平にしたい、フェアにやりたい」と説明しまして、3人とも同じように上げたわけです。すると、アメリカの人がすごく怒りまして、非常によく働いている人と、あまり働いていない人と同じように月給が上がるのはお

#### \*\*\*\*\* 主な内容 \*\*\*\*\*

「国際青年交流会議」基調講演…………… 5～8	HOW TO お料理教室…………… 11～12
人間関係の文化差	「第4回青年の船」25周年の集い…………… 13
国際日本文化研究センター所長 河合隼雄	アメリカのホストファミリー…………… 14
北海道・東北ブロック大会…………… 9	ホームステイ&スタディツアー…………… 15
ニューヨークに麒麟舞う…………… 10	アセアン青年へのアンケート…………… 18～19

#### 〈表紙の説明〉

タイ  
テパリト・セルグボクさん  
「夢」  
アジアのこども絵画展より  
優秀賞受賞作品

かしいと言ってきたわけです。日本人の考え方によりますと、働く人も働かない人も1年経ったら同じように上げるのを、公平と言っているのです。ところが、アメリカの人の考え方では、よく働いている人が高く上がって、あまり働かない人はあまり上がらないというのが、フェアだと思うのです。そこで、英語は通じているのですが、考えが通じないためにもめたということがあります。

### フィリピン

次の例、これは、日本人がフィリピンに行きまして、フィリピンの人と非常に大事な契約を結ぶことになっておりまして、午後2時に会うという約束をしました。日本人は、ちょっと早めに行きまして、待っておりましたが、なかなかフィリピンの人に来ない。2時間ほど待ちましたが、来ないので、自分は非常に大事な契約だと考えておったが、2時間経っても来ないということは、おそらく相手の人はもう契約を結ぶ気がないのだろうと、不思議に思ったり、半分怒ったりしながらそこを引き上げました。フィリピンの方は、3時間ほど遅れて、そこへ現れました。そして、こんな大事な契約であるのに、自分はわずか3時間しか遅れていないのに、待っていないということは、日本人はこれに熱心でないのだろうと考えて、そのフィリピンの方は契約を結ぶのを止めてしまった。時間をどの程度守るかというのは、カルチャーによってずいぶん違うと思います。私が子供のころなどは、私は日本の田舎の出身ですので、時間を2時間くらい遅れるのは当たり前のことでした。村で、例えば8時に集合するということになっていたら、皆が家を出るのが8時半頃というような、

そんなことをやっていました。日本の中でも文化は変わってきているわけです。

### アラブ

あるいは、こんな話を聞いたこともあります。ある日本人が飛行機のなかで、アラブの人が病気で困っておられるのを親切にあげました。日本人の考えだと、非常に親切にしたので、飛行機を降りて別れるときには相手の方が何度も何度もお礼を言われる、あるいは感謝の気持ちを何度も表明されると思っておりましてところが、ほとんどそういうことなしに、さようならと別れて行きました。日本人はすごくびっくりしまして、あちらの人には親切ということが通じないのだろうか、と思ったということです。アラブの考えによりますと、親切をした人はそこで非常に良いこと、善行を積んでおりますので、それで既に報われているわけですから、わざわざ親切をされた人が何度も何度もお礼を言う必要がないのです。むしろ、親切をしてもらった機会を作ってくれた方に親切をした方が感謝の言葉を述べねばならないくらいではないかと思うのですが、日本人にはそういう考え方がなかなかわからない。



## ネパール

それから、またこんな例も聞きました。日本人がネパールに行きまして、付き合いをしていたネパールの方に非常に価値の高い贈り物をしました。贈り物をしたから、何か返ってくるだろうと心の中で思っていたわけです。ところが、その日本人の人がちょっとネパールを離れて日本へ帰るという時に、せめて何かお土産でももらえんと思ってたのが何も貰えないのです。それで、どうも自分があげたものの値打ちが分からなかったのではないか、あるいはネパールの人は何でもあげたものは取ってしまうのではないかとか、そんなことを日本人の人は思っていたようです。ところが、日本人がそれからまたネパールへ行きまして、十何年か経ったあとで、そのネパールの方から素晴らしい贈り物を貰ったそうです。日本人はびっくりして、こんなものをどうして戴くのかと聞くと、お前は十何年前に非常に大切なものをくれたではないか、と言われた。もらってすぐ返すと関係が切れてしまう。もらってすぐお返しをしたら、ゼロになってしまう。ところが、沢山のものを貰ってずっと持っているということは、関係がずっと続いているわけです。あなたと私の関係はそんなすぐには切れない。十年経っても変わらないのだと確かめた上でなら、何か返してもよろしい。そういう考え方だということが判ったそうです。日本でも昔はそういうことがありました。私の母親などは、何か贈り物をしてそれと同じくらいのものを直ぐ返してくる人をすごく嫌っていました。何かあげたらすぐ返してくる、けしからんとよく怒っていました。それは、何か俺とお前は関係ない、ということを行っているよう気がするのです。

それにしても、10年以上も持ち続けるというのは、なかなか文化の差は大きいなと私は思いました。

## 国際結婚

それから、国際結婚のことを思い出しますが、日本人の女性がドイツの男性と結婚した例で、ドイツ人の夫の方がいつも嘆いていたのは、自分の結婚した日本の女性は、非常に知識もあるし、趣味も豊かにある。そういう人であるのに、パーティーに行きまして、会話になると、日本人の女性は何を聞かれてもイエス、イエスと言っているだけで自分の意見を全然言わない。例えば音楽の話になって誰かがベートーベンはよろしいですね、と言う。その日本の女性はベートーベンのことを沢山知っているのだから何か言えばよいのに、よろしいですねと言われたら「はい」と言うだけで、後は何も言わない。だから、ドイツの友人達に、おとなしいだけ取り柄で、知性の非常に低い、知識もほとんど持っていない日本の女性と結婚したのだろうと誤解されると。パーティーの帰りの車の中はいつも喧嘩で、男のほうは「お前はもっとしゃべれ」と怒る。日本女性の奥さんは「私は知っているのでしゃべる必要はありません」。なかなか二人で通じ合わない。

もう一つ例、これは、日本の男性がスイスの女性と結婚した例ですが。スイスの非常に美しい女性と結婚しましたので、私などは非常にうらやましくて、友人に結婚生活はどうですか、と聞くわけです。すると彼は、「なかなかよろしいが一つ非常に困ったことがある」。何が困ったことかという、一日に数回「私はあなたを愛している」と言わなくてはならない。それが非常に困ったこ

となんだと。日本人は夫婦の間で「あなたを愛している」などと言うことはまずありません。それは愛しているということが絶対的な前提ですので、わざわざ言葉にする必要がない。例えば、私が、今日ここで国際会議に出ましたので、少し国際的になりまして、家に帰って私の妻に「愛しているよ」というようなことを言うと、私の妻は「これは東京で何か悪いことをしてきたのではないか」と思うのではないかと思います。だから、日本の男性にとって毎日数回「愛しているよ」というのは非常に苦痛で、沈んだ気分です。「愛しているよ」というわけですから、スイス人の奥さんには、言い方が明るくないのでどうもおかしいと思われる。これが非常に大変だ、というようなことを言っておりました。

## 文化差を知る

例をあげるのはこのへんで止めておきまして、申し上げたいのは、文化差というのを考えずに他人を簡単に批判するとか、価値判断するということは避けたいと思います。皆さんも日本という国に来られて、いろいろ変に思うことがあっても、だから日本人は変だ、おかしい、というのではなくて、そこで、考えたり、日本人の話の出来る人に理由を聞いたりしてみてください。そうすると、その背景にこういう考え方があったのか、とわかってくると思います。

世界中のそれぞれの国が少しずつ違っていると、お互いに付き合ってもなかなか難しいから、一つの考え方で統一した方が良いのではないかと考える人もいるかもしれません。全ての人間関係の在り方

を一つの考え方でまとめてしまおうと。しかも、その時、こういう考え方が正しいからこの考えにまとめよう、と主張する人もあります。その一つの典型が、やはりヨーロッパの近代に起こってきた考え方です。その考え方は、日本にも随分と入ってきて、我々の生き方は、日本的な生き方とヨーロッパの近代の生き方が混ざったかたちで生きていると思います。

アメリカは、ヨーロッパの近代の考え方をもっと先鋭にした、ある程度極端にまで推し進めた考え方で生きていると言うことができると思います。その考え方に皆統一してしまったらどうだろう、という考え方がありますが、私はそれには反対です。

確かに世界中が一つの考え方になれば便利かもしれませぬ。この会場の建物、このマイクロホン、私が着ているこの服とか、こういうものはすべてヨーロッパ近代の考え方に我々は従っているわけです。それは、ヨーロッパに起こりました近代科学が技術と結びつき、非常に便利で能率のよい快適な環境を作り出しております。それで、すべての考え方もそれに合わせてよいように思うのですが、私はヨーロッパ近代の考えをそのまま推し進めていくということはやはり危険ではなかろうかと考えております。

その危険性の一部がある程度出てきておりますのは、いわゆる近代国家と呼ばれている国に非常に犯罪が多くて、街を安全に歩けなかったり、麻薬が非常に広がったり、問題が生じております。アメリカへ行きますと、そこはユートピアではなくて、非常に快適に暮らしている人とともに非常に辛い危険な生活をしている人もおられるという事実があります。私はヨーロッパ近代の考え方を



否定するのではなくて、それを取り入れながら、何か違うものが混じり合ったり、あるいは対決したりすることによって新しいものが生み出されるようになるのでは、と思っています。そのために

は、今日のようにいろいろな国の人が集まって、自分の国のいろんな文化をお互いにわかりあっていくということが大事ではないかと考えています。  
(つづく)

## 北海道・東北ブロック大会に参加して

第7回世界青年の船  
青少年国際交流推進センター運営委員

高田 健二

9月7日～8日の1泊2日、岩手県で行われた「北海道・東北ブロック海外派遣青年のつどい」(通称：ブロック大会)に参加させていただきました。

今回の目的は、二つありました。一つは、ブロック大会がどのようなものであるのかを体験すること。そして、最近の事業参加者にとってどのような位置付けなのか知ることです。

ブロック大会については、「楽しく、世代を超えた交流をはかることが出来る企画」という率直な印象を抱きました。これは、幹事県である岩手県の青年海外派遣岩手県連の佐々木会長を始めとする実行委員の皆様のご尽力の賜物であることはいうまでもありません。世代を超えた交流の場、地域の特色を実体験できる場、日本の良さを発見する場、それがブロック大会の醍醐味であるような気がします。

次に、最近の事業参加者における位置付けですが、事業を超えた連帯感を醸成する良い機会であると痛感しました。東京圏では、同事業参加者が多いため、他事業参加者との連携をとらなくても

十分に企画を達成できる余地はあるように思います。しかし、地方では必ずしも多数いるわけではありません。そこで、このような事業を超えた企画を運営し、参加することで、これまで何となく存在していた「事業の壁」を乗り越えることができるのだと感じました。

今回、私自身は同年代のメンバーとともに行動し、さまざまな思い出をつくりました。ある意味では、ブロック大会の良さは林檎の味と同じで、食べてみなければ分からないものなのかもしれません。みんなが「楽しかった。来年は宮城で会おう」といって別れる姿を見て、私を含めてブロック大会を体験した人々は、今後の人生でこれまでに以上に多くの豊かさを見いだしたのだと確信しました。



懇談会で  
締め音頭を取る  
佐々木会長

## ニューヨークに麒麟舞う ～伝統芸能で国際交流～

とっとり青友会 長谷川 浩 司

9月21日、22日の両日にわたり、ニューヨーク市の「カーネギーホール」に於いて、鳥取が誇る因幡の獅子舞を披露しないかと話しが来たとき、「ホンマカイナ」と我が耳を疑ったのは今年の2月であった。それがまさか実現しようとは思っていなかった。とにかく、輝く摩天楼と三日月に迎えられ、我々14名はニューヨークに到着したのである。

カーネギーホールと言えは100年の歴史を誇る世界に轟くコンサートホールではあるが、大部屋とソロ用の個室の楽屋しかなく緞帳などもない本当のコンサートホールなので、勝手に今までとは違った。しかし、そんなことはお構いなしに麒麟獅子は優雅にゆっくりとまるで天から降りるように舞ったのである。ちなみに私は、獅子の後ろという非常にプライド的なポジションにいたのだが。

本公演が終わり、ホールの前で何を思ったのか、獅子が再び華麗なる舞を披露したのである。道行くニューヨーカーからぱちぱちと拍手をいただきすっかり満足したのか、いい気分でカーネギーホー

ルを後にした。

この公演はポスターなどで宣伝されてはいたが、果して獅子舞がわかってもらえるだろうかと公演前はみんな心配していた。それだけに、公演終了後の観客の拍手に一安心したのである。伝統芸能を披露することでも国際交流ができるのだなあとしみじみ感じた今回のニューヨーク公演であった。

この公演後、国内（県内）においても是非獅子舞をして欲しいという依頼が相次ぎ、にわかになんか忙しかったこともまた収穫であろうか。



### TOPIC

東京近郊の方に耳寄りな話し……

—— 駒場留学生会館オープンハウス ——

WELLCOME TO KOMABA!

日時：11月23日（祝）午前10時開催

会場：駒場留学生会館

（井の頭線 駒場東大前 徒歩3分）

～入場は無料～

\*車でのご来場は、ご遠慮下さい。

内容：世界50か国以上の料理と様々な展示  
民族芸能

皆さんも、身近なグループで国際お料理教室を楽しんでみませんか？

県内の各地でお料理教室を展開している静岡 IYEO の役員に、どのように開催しているかレポートしてもらいました。これほど、しっかりできなくても小グループで外国の方からお国料理を伝授してもらう企画いかがですか？

## HOW TO 料理教室

静岡 IYEO 事務局長 本 多 由 佳

ポイント：

- ・国際交流が盛んでない市町村の開催→市の広報に掲載してもらえるので、幅広い層の参加が望める。
- ・その市町村在住の外国人に料理を教えることにより、今後の交流が望める。
- ・IYEO の料理教室は、料理だけでなくその国の様子を話してもらい理解を深める。

担当者：事務局と会計の他に、担当者を2名

- A. 受付担当（電話での申込み受付にすると昼間もかかってくるので、自宅に誰かいる方が望ましい。はがきで応募してもらい、案内を返送してもよい。）
- B. 会場確保+先生との連絡役+材料調達1人

### 準備スタート！

2 か月半前～

- AB  会場探し（駅の近くを）
- AB  先生探し（日本語が出来、料理教室のやったことがある人の方が要領が判っているのでより良い+料理の決定）
- 事 AB  日時の決定
- 事  「静岡 IYEO 通信」連載（偶数月 15 日締切りするので早目に連絡）
- 事  地元市広報への掲載依頼（市国際交流協会への依頼、市の広報は掲載の1か月前に原稿締切りするので早めに連絡を）

2 か月前

- 事  近隣国際交流協会、県国際交流協会へ広報掲載依頼

事  県教育委員会へ文書連絡

事 AB  タウン誌など思いつくところに連絡

事 B  チラシを作り、先生に渡す

1 か月前

A  予約の電話が入り始める。名前、電話を聞き、持ち物の確認（エプロン、フキンなど）

2～3 週間前

B  先生と材料、レシピの打合せ

B  会場の下見、道具、ゴミの出し方確認（道具が足りなければ、持ち寄る）当日ラジカセを借りる手配

事  人の集まりが悪ければ新聞掲載依頼

2～3 日前

A  申込み締切り

B  先生との最終確認（当日の時間の確認、国紹介の資料、CD、テープ持参の確認）

当日まで～

B  レシピ作成

会  アンケート作成

会  謝金/領収書の用意

B  材料の計算、調達

当日～

- 事会AB  会場設営 (パネル・旗・資料などの展示)  
A  電話受付をした人が受付対応 (参加費と交換で名札、レシピ)

終了後

- 会  お金の清算  
事  アンケートまとめ

## アメリカのホストファミリー

日本青年国際交流機構中部ブロック幹事  
醍醐 良子

毎年夏休みに、学生の語学研修、ホームステイの引率でアメリカに行き、私もホームステイさせていただいています。今年のホストファミリーは、大学でコンピュータを教えているカールと、3人の子供の世話をしながら弁護士を目指し、夜間法律学校へ通っているローリーでした。

アメリカでホームステイされた方はご存知だと思いますが、ホストファミリーの家に着くと、まず自分の部屋に案内され、その後に各部屋、夫妻の寝室までも案内して下さり、冷蔵庫までも開けて、自由に飲み物、食べ物を取るようになって下さることがほとんどです。

コンピュータの専門家カールは、インターネットを教えてくれて、何か日本の情報で知りたいものはないかと尋ねてくれましたので、三重県庁をと言いましたら、すぐに“Welcome to Mie!”と出たのには感激しました。外国で日本の情報を得るということは、ニュースもそうですが、何か理屈抜きで嬉しいものがあります。

また努力家のローリーとは、週末深夜まで、日米両国の抱えている社会問題、教育問題、そしてお互いの人生観などを話し合いました。



▲ カールとローリーと子供たち  
フレンドリーな犬、バスターも共に

一昨年、サッカーの世界カップがアメリカで開催されていた時に、私たちはロサンゼルス郊外に滞在していたのですが、ホストファミリーの中にとっても有名なスポーツキャスターがいて、ある日の授業中に彼が現れ「ランチを忘れたよ、カズ」と言ってサンドイッチを届けてくれました。

その日の夜、テレビを見ると、まさにその彼が映っていてサッカーの選手にインタビューしていました。翌日、彼のところで世話になっているカズ君は「ゆうべはとても楽しかったよ。テレビスタジオに連れていってもらって、サッカーの選手と話ができたり、サインもしてもらった。一生の思い出ができたよ。」と言って、皆から羨望的でした。毎日とても忙しいのに、一か月も日本人を受け入れ、クラスやアクティビティーの場所に奥様が送迎して下さり、帰国の日には早朝にもかかわらず、家族全員で見送ってくれました。

また、昨年私がホームステイさせていただいたファミリーは、モービルホームに住むとても元気な72歳と73歳のシニアカップルでした。

私は部屋は4畳ほどで、あと夫妻の寝室とキッチンのみです。初対面の時、「家は小さいけれど、楽しく過ごしてくれることを望むよ」と言いながら、退役軍人のジムは大きな手で私の荷物を運んでくれました。「子供たちは皆独立したから、家を売ってここに引っ越してきたのよ」とジーンはシニアカップルが多く住むこのモービルホームコミュニティが気に入っている様子で、近くの図書館、プール、娯楽施設などを案内してくれました。「私たちが健康である限り、ホストファミリーを続けたいわ」とジーンはアルバムを広げながら、

これまで世話をした学生たちの写真を見せ、それぞれのプロフィールを説明してくれました。

ジーンはこのコミュニティーの中でもチャリティー活動をしており、アメリカ社会ではボランティア精神が本当に根づいているのを実感しました。

これまで、多くの家庭にホームステイ、ホームビジットさせていただきましたが、本当に心の広い人が多いことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、2か月後、「世界青年の船」の外国青年が地方プログラムとして三重県でホームステイします。アメリカのホストファミリーのように、オープンに楽しく、我が家でも過ごしていただきたいと思っています。

## TOPIC

### エクアドル青年と新宿区立落合第二小学校

この9月、エクアドルの青年から「新宿区立落合第二小学校」にエクアドルの様々な生物のカラーパネル写真が贈呈されました。

「第7回世界青年の船」の課題別視察で、昨年1月に訪問させていただきましたが、その外国参加青年の一人が、エクアドルのディエゴ・ロンベイダ氏だったのです。彼は、生物学者としてカエルの研究をしており、自らカメラを携えて様々な生物の生態系を記録しています。

1年半前の子供たちの歓迎が心に残り、再度の訪問を実現させました。



▲ 児童の代表に、エクアドルの生物のパネル写真を贈るディエゴ・ロンベイダ氏

## 「第4回青年の船」25周年の集い

「第4回青年の船」25周年の集い  
実行委員長 大塚 信美

今から4半世紀前の昭和46年、第4回青年の船は、夢と希望を乗せて東南アジア5か国を歴訪し、国際親善の一役を努めてきました。

「我々は、アジアの青年となにをなすべきか」をテーマとして各国青年と交流を深め更なる友情を誓い合いました。それから25年の歳月が経過しました。

我が第4回の船は、5年ごとの大会はもとより、毎年行われている班長会は全国各地において開催され、そこには近郊のメンバーも参加し、活動の情報交換や友情を深め合ったりしています。

さて、今回の集いの開催地は千葉県柏木市に決定し実行委員会を発足し、準備をすすめてまいりました。8月3～4日の両日、120名の盟友が柏木モラロジー研究所へ一同に会し、再会を喜び合いました。今回の集いは、国際性のあるものとしたということ、マレーシアでお世話になったアブドラ元青年少年局長ご夫妻と一緒に乗船した各国のOMをお招きしました。まるで25年前の「さくら丸」に乗っているかのような気持ちになってしまうほどでした。



## 「心の中に国境を作らないで」

2日目には、アブドラさんに特別講演して頂きました。「心の中に国境を作らないで」という内容のお話でした。その後別れを惜しみながらOMの皆様と有志の20余名が参加し、北アルプス方面へ小旅行へ行きました。楽しかった集いもあったという間に過ぎ、5年後の再会を約束して別れました。我が第4回の船の「友情のあかし」として次の様な詩が記されました。

### 友情のあかし

高空をわたる風のように  
私たち「第4回青年の船」の思い出は  
アセアンの海いっぱい  
ひろがっています  
私たちのアルカディアは  
サクラ丸は  
いまもみんなの心の海を  
明日に向かってまっしぐらに  
走っているのです  
お互いのかげいのない時のながれを  
なつかしみつつ  
25周年の集いを記念して  
私たちの友情のあかしを  
黄金のペンで書きとめましょう



## マレーシアふれあい物語

去る8月28日～9月2日まで「東南アジア青年の船」のマレーシア同窓会組織（KABESA）の受入れにより、マレーシアスタディツアーを実施しました。ホームステイの2泊3日を含む「ふれあい度100%」の楽しいツアーとなりました。

年代も地域も異なるメンバーで楽しい6日間を過ごすことができ、一般のツアーでは味わえない良さについて参加者の声で綴ってみました。

### 〈参加者の皆さんの声〉

3年ぶり7回目のマレーシアでしたが、KLタワーやツインタワー等経済発展のすごさを感じました。参加人数が少なかったのは残念でしたが、受入れの皆さんにはお世話になり感謝しています。

（第7回青年の船 田中 悦子さん）

マレーシアのホームステイを体験させていただき、トイレットペーパーを使用しない、クーラーを使わない、お風呂にシャワーがないなど、日本の生活習慣とずいぶん違うことが新鮮でした。私たちから見ると、ずいぶん遅れているように思いますが、トイレットペーパーを使わないから、自然を保護できる、クーラーやシャワーを使わないから環境にもやさしいということに気がつきました。

（第7回青年の船 倉橋 静夫さん）

今回の旅は、短いながらも多くの体験ができ、大変有意義なものになりました。さしずめ内容が

ぎっしりつまったところで「五目いなりずし」とでも例えられるかもしれません…。

（第5回世界青年の船 渡邊千津子さん）

参加者の名簿を成田で渡された時、私だけが〈一般〉と書かれていたので何となく心配でしたが、今は参加して良かったと思います。この短期間にできること、やりたいことの全てを堪能しましたが、まだまだマレーシアに対する興味は尽きません。是非今度はマレー語を覚えて参加したいです。

（一般 織田 美花さん）

この5日間は、僕にとって一つのキッカケでした。今回出会ったマレーシアの友人との関係はこれから作っていくものだろうと思います。マレーシアを去った今は、彼らをそしてマレーシアの国そのものを自分の中でより近く感じることができます。このことは新しいものを吸収し、自分の世界を広げるいい機会となったと思います。

（第8回世界青年の船 佐々木宙之さん）

### ▼ KABESAのメンバーと共に



日本でも NGO（政府組織）や NPO（非営利組織）への注目が高まっていますが、これらの組織で活動経験のある人はまだまだ少ないというのが現状です。その中で、社会活動の活動家を育てるために、こうした組織が発達しているアメリカへの研修旅行も最近注目されているプログラムです。

インターンシップ・プログラムを行っている団体は数多くありますが、その中で IYEO 椿次長の友人であるエリッサ・リーフさんが勤務する「日本太平洋資料ネットワーク」（JPRN）についてご

紹介してみます。

東京とカルフォルニア州に事務局を置く団体で、今年の春と夏に日本から 27 人の実地研修生（インターン）をサンフランシスコ周辺の NPO に派遣するプログラムを実施しました。参加者の声を通して内容を紹介します。また、来年の 2 月 27 日から 3 月 27 日にかけてのプログラムも予定されていますので興味のある方は、JPRN 事務局にお問い合わせ下さい。

## インターンシップを終えて

小林 彩野

### SLiC

私が JPRN の NGO インターンシップ・プログラムを知ったのは、去年の 10 月。その頃の私は、フィリピンでの 1 か月に渡る植林ボランティアを終えて間もなく、また何かを始めたくなくて国際ボランティアセンターへ衝動的に行ったのである。掲示板に掲げられていた JPRN のプログラムを見たとき、これが次の目標だと思った。

そして 1996 年の夏、私はサンフランシスコへ向かった。私のインターン先は、Overseas Development Network (ODN) という NPO である。

ODN は、飢餓や貧困や社会的不公正のような地球規模の問題に取り組んでいる学生を組織化している、全米規模の NPO である。スタッフの平均年齢が 25 歳と若く、また、大学生を常に 10 人程インターンとして受け入れているため、学生のサークル活動のような、インフォーマルな雰囲気

のオフィスであった。

私がインターンをしている間に、ODN の年間を通しての一番大きな企画である、Summer Leadership Conference (SLiC) が開催された。

これは、アメリカ各地の大学生がサンフランシスコに集まり、4 泊 5 日のキャンプを通して、キャンパス内での ODN 内部の運営の仕方や地球規模の問題について理解を深め合う、といった主旨のものである。私にとって SLiC は、様々な人種やバックグラウンドを持つ同世代の若者が、地球規模の問題に対してどのようなことを考えているのかを知ることのできる絶好のチャンスであった。参加する仲間といい、話し合う内容といい、実にボーダーレスな会議なのである。また、日本とアメリカの文化の違いを体感することのできる、非常に興味深いものとなった。

SLiC では、問題に対してただ漠然と議論し合



うのではなく、自分達で実際に役割を演じ、その体験に基づいて意見を出し合うといったような、実践的な議論の進め方をしていた。その例を一つ挙げると、SLiCでは、「貧困」について考えた時、Hunger Banquet という方法をとった。このHunger Banquetとは、くじ引きで金持ちと貧民にわけ、それぞれその役割になって、夕食をとるといったものである。金持ちは、豪華な食事をテーブルでとり、また食事をサーブしてもらう。一方貧民は、地べたで簡素な食事をとるのである。食事中は皆ふざけ合いながら、その役になりきっていたが、その後での意見交換では様々な鋭い意見が出た。私もこのHunger Banquetを通してある体験を思い出した。それは、以前ベトナムに行った時、アイスクリーム屋のテラスでアイスクリームを食べている自分と、店の前で物乞いをしている人々という対照的な互いの姿に、ショックを受け、大好きなアイスクリームが食べられなかったことである。私はその体験と貧困に対する考えをつたない英語で話した。皆このHunger Banquetを通して、貧困についてそれぞれの考えを出し合うのに真剣であった。貧困は様々な問題が複雑に絡み合っているため、明快な結論をくだすことはできない。だがSLiCは、結論を出すために集ま

り、話し合った訳ではないのだ。その意味において、このSLiCは、互いの認識を深め合うという当初の目標を達成し、大成功に終えることができたと思う。

私にとって、インターンシップで得られたことは、気がついたことだけでも沢山あるが、その中から大きなものとして三つ挙げられると思う。一つに、NGOという一つの組織において、ボランティアではなくインターンとして働くことにより、今までとは違うNGOの側面を知ることができたこと。二つに、旅行者という視点のみではなく、アメリカ社会に参加することから得られる視点により、アメリカという国について考える事ができたこと。そして三つに、今回のインターンシップにより、JPRNのスタッフの方々、このプログラムのメンバー、そしてインターン先のODNの方々などたくさんの人々と出会うことができたということであろう。

最後に、お世話になったJPRNの方々に、心より感謝したい。

日本太平洋資料ネットワーク(JPRN)東京支部

TEL 03-5210-3373

FAX 03-5210-2047

(担当：下出)

▼ 仲間と共に(筆者：右から2番目)



# SSEAYP EX-PY あんけーと

## 東南アジア青年の船事業既参加外国青年の意識と事後活動に関する実態調査

総務庁青少年対策本部が実施した「東南アジア青年の船」(1974～1994)の外国人既参加青年及びナショナルリーダー 4,272名のうち住所不明を除く 4,071名に、平成7年9月29日に質問票を発送し、平成7年12月25日の最終締切りまでに1,665通の回答がありました。調査結果の一部を紹介します。(回答の頭の番号は、調査票において回答を並べた順序を示します。)

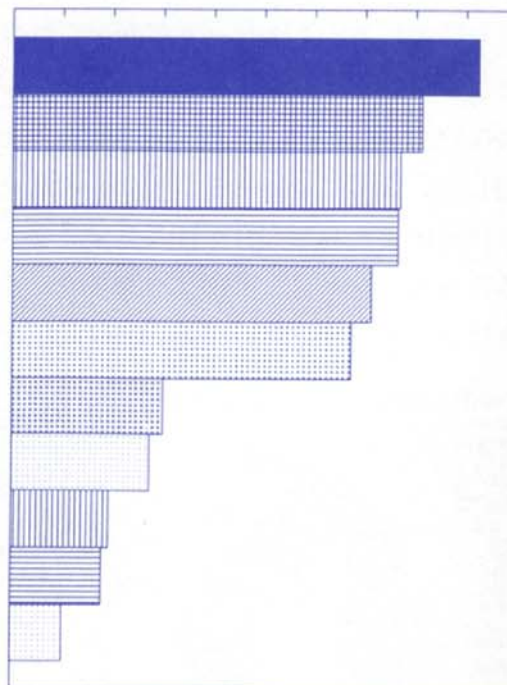
### 1 事業に参加した動機

問 あなたが東南アジア青年の船に参加した動機は何ですか。

(各項目について、A：そう思う、B：いくらかそう思う、C：そうは思わない、D：わからない、のどれかを○で囲んでください。)

「A：そう思う」の比率

⑤国際交流に興味があった	92.6%
②アセアン諸国を訪問したい	81.3
④アセアン諸国の青年と友達になりたい	77.0
①日本を訪問したい	76.6
③日本青年と友達になりたい	71.4
⑧自己の向上のため	67.4
⑦政府、職場、青少年団体又は学校から勧められた	30.2
⑨経歴、地位の向上のため	27.5
⑪名誉になる	19.4
⑥既参加青年に勧められた	18.1
⑩仕事に役立つ人脈を作る	10.3



各項目について「そう思う」と答えた比率の高い順に並べると上のグラフのとおりで、「国際交流に興味があった」をほとんどの人が選んだのは当然として、「日本を訪問したい」よりも「アセアン諸国を訪問したい」の方がやや多く、「日本青年と友達になりたい」よりも「アセアン諸国の青年と友達になりたい」の方がやや多くなっています。次の質問に対する回答でも同じ傾向が見られ、「日本に対する理解が深まった」よりも「アセアン諸国に対する理解が深まった」の方がやや多くなっています。また、「アセアン諸国に対する評価が高まった」という人が約7割に達しており、東南アジア青年の船が日本とアセアン各国の間だけでなく、アセアン各国間の相互理解に大きく寄与していることが分かります。

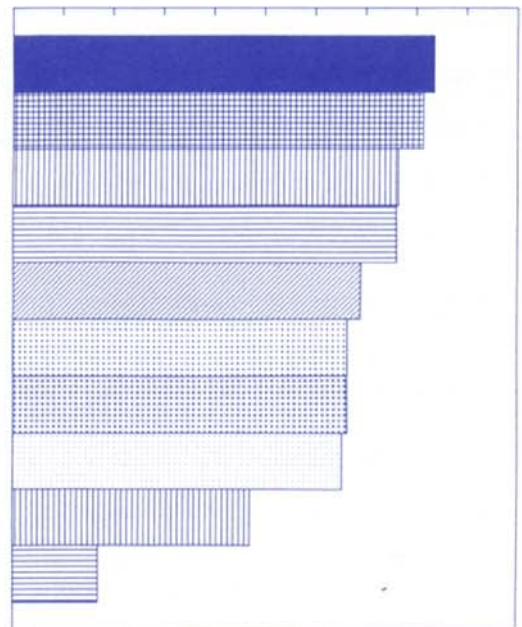
## 2 事業に参加してよかったこと

問 あなたが東南アジア青年の船事業に参加してよかったと思うことは何ですか。

(各項目について、A：そう思う、B：いくらかそう思う、C：そうは思わない、D：わからない、のどれかを○で囲んでください。)

「A：そう思う」の比率

⑧国際交流の重要性を認識した	83.6%
⑤アセアン諸国に対する理解が深まった	81.5
③日本に対する理解が深まった	76.6
①自分の国及び文化に対する理解が深まった	76.2
⑥アセアン諸国に対する評価が高まった	69.1
⑦全世界的問題に対する関心が高まった	66.5
②自国に対する評価が高まった	66.4
④日本に対する評価が高まった	65.4
⑩人生観が変わった	47.2
⑨職業選択に対する考えが変わった	17.0



大好評マレーシアスタディツアーに引き続き第2弾

### 真夏の南半球で過ごす

## 「オーストラリアふれあい物語」

東京発 1997年2月6日(木)～12日(水)

東オーストラリアの美しい街ブリスベンにて、「世界青年の船」の仲間と一緒に過ごす5泊7日の旅。ホームステイや現地交流および名所観光など盛りだくさんの内容をご用意しています。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

募集人員：15名（最小催行人員10名）

申込締切日：1996年12月27日

参加費：245,000円（予定）

\*定員になり次第締め切らせていただきます。

〈お問い合わせ・申込み〉

財青少年国際交流推進センターまで

### 編集後記

お客様の多い季節です。各地でも、外国青年の受入れに忙しいことと思いますが、楽しい活動の秋を過ごして下さい。

### 全国大会のお申込みは、お済みですか？

宮崎県シーガイアで、11月30日(土)～12月1日(日)の両日に「日本青年国際交流機構第13回全国大会」が開催されます。

会員の皆様には、前号で参加申込み書をお送りしましたが、参加される方でまだ申込みをしていらっしゃらない方は、至急お申込み下さい。

宮崎県青年国際交流機構のメンバーが、準備万端整えてお待ちしております。



お正月号は、船長のインタビューなどの新春らしい企画を考えています。皆さんも楽しい記事を提供して下さいますようお願いいたします。

\*本誌の年間講読をご希望の方は、財青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM (マクロコズム) 11月号 Vol.13 1996年11月1日発行 (隔月発行)

編集：マクロコズム編集委員会

発行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

e-mail LDP04056@niftyserve.or.jp

編集協力：総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定価：195円 (本体189円)

印刷所：株式会社 絢文社

TEL 03-3959-3960

## 「第23回東南アジア青年の船」

### ホストファミリー 招へいプログラム

(日本滞在：1996. 9. 24～9. 27)

「東南アジア青年の船」の寄港地プログラムの特色は、何といたっても訪問国の全てで行われるホームステイです。長年に渡ってアセアン各国でホストファミリーを引き受けて下さっている方々の中から、各国ごとの代表を迎えて日本を知っていただくために招へいしています。



▲ 総務庁青少年対策本部中川次長より感謝状を贈りました

#### ▼ 日本の茶道体験。ウーン美味？



「東南アジア青年の船」リユニオン  
パーティーで、ホストファミリーと

#### ▼ ナショナルリーダーを歓迎

日本でのホームビジット体験を。坂田家で畳の部屋と日本料理を  
▼ 堪能して満足そうなホストファミリーの皆さん

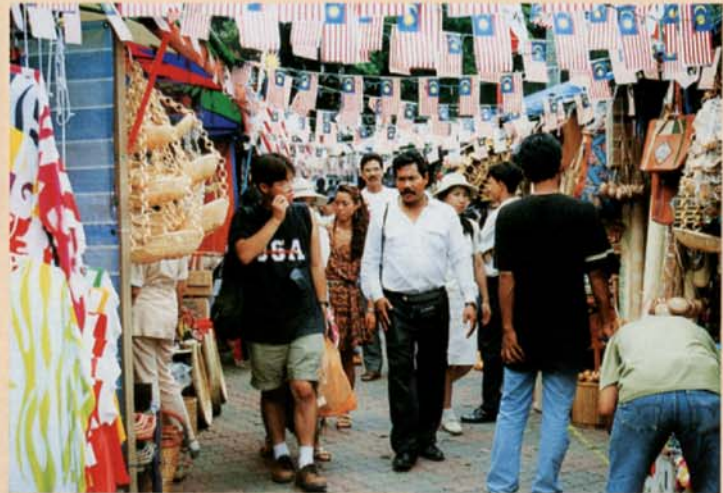


## 行ってきました、マレーシアスタディツアー 感動体験 「マレーシアふれあい物語」

去る8月28日～9月2日まで東ア船のマレーシア同窓会組織の受入れにより、マレーシアスタディツアーを実施しました。参加者5名という、小さなグループではありましたが、その分密度の濃い交流ができ、マラッカ旅行やホームステイを含んだ「ふれあい度100%」の楽しいツアーとなりました。



◀ モスクに入る時は、即席モスリムに



▲ マラッカのマーケットをそぞろ歩き



▲ 見慣れないフルーツがいっぱい



▲ 最後の夜。こんなにたくさんのメンバーが集まってくれました

### 速報!!

来年2月 オーストラリアスタディツアー企画  
真夏のオーストラリアで世界青年の船同窓会  
メンバーと「ふれあい体験」をしてみませんか?!